

仲間と協働しながら音楽表現を創意工夫する生徒の育成

～中学1年生 往還的な学びを通して～

味岡中学校 岡村奈津美

1 はじめに

音楽の授業においては、前学習指導要領で、「音楽のよさや楽しさを感じるとともに、思いや意図を持って表現したり味わって聴いたりする力を育成すること」、「音楽と生活との関わりに関心を持って、生涯にわたり音楽文化に親しむ態度を育むこと」等に重点を置いて、その充実を図ってきた。一方で、「感性を働かせ、他者と協働しながら音楽表現を生み出したり、音楽を聴いてそのよさや価値等を考えたりしていくこと」、「我が国や郷土の伝統音楽に親しみ、よさを一層味わえるようにしていくこと」、「生活や社会における音や音楽の働き、音楽文化についての関心や理解を深めていくこと」については、更なる充実が求められるところである。（「平成29年告示中学校学習指導要領」より引用）

このような背景から、平成30年より「感じたことを自分の言葉で表現し、コミュニケーションを通して豊かな音楽表現ができる生徒の育成」を主題に研究を進めてきた。ICレコーダで録音した音源をもとに、音楽表現を試行錯誤する合唱練習など、表現活動を通して音楽を形づくっている要素を意識し、音や教材とより関わり根拠をもってコミュニケーションをとる姿が多く見られるようになり、研究の一定の成果を感じ取ることができた。

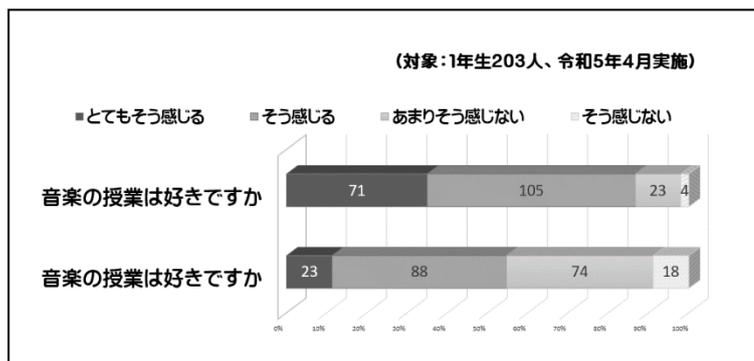
令和3年1月の中央教育審議会の答申では、令和の日本型学校教育の構築を目指し、一人一人の児童生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるよう、その資質・能力を育成することが求められている。学校現場でもICT化が一気に加速し、本校でも1人1台のタブレット端末で、じっくりと時間をかけて音楽を聴ける環境が整った。生徒たちは、自分の好きなタイミングで、音楽を一部分だけ繰り返しながら聴くことで、さらに細かなところまで、音楽を形づくっている要素と結びつけながら聴く楽しさに気付く姿が見られた。

しかし、自身が感じる音楽の良さと、音楽を形づくっている要素の気付きを結び付けて考えることや、1時間の授業を楽しむことができるものの、学んだことを次につなげ関連付けて学ぶことや、自ら学びを深めていくまでには至らなかった。そのために協働的に学んだことを自分の課題として次の授業につなぐ、領域と領域や単元と単元をつなぐなど、それぞれの学びをつなぎ、自らの課題を見つけ深めていくことが課題だと考えた。

2 主題設定の理由

令和5年度4月に本校に入学した中学校1年生は、音楽経験に関わらず、互いに意見を出し合い、協働的な学習活動に取り組む生徒が多い。しかし、歌唱表現の場面では、思うように声が響かなかったり、自信のなさから表情豊かに歌うことに抵抗を持ったりしている生徒の様子が目立った。令和5年4月に行った『音楽に関する意識調査』では、学年の

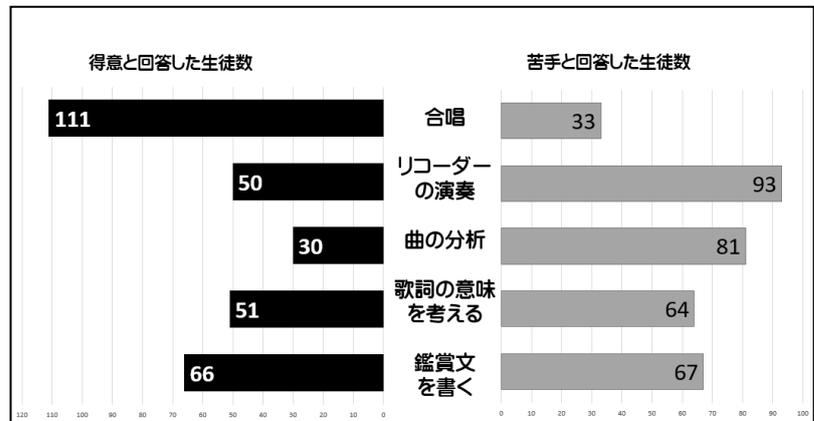
【資料1 音楽に関する意識調査】



8割近くの生徒が、「音楽の授業が好きですか」の問いに肯定的に答えるも、「音楽の授業は得意ですか」の問いに肯定的な回答をした生徒は半数以下で、その関連がないことがわかった(資料1)。

さらに、「どの内容が得意、苦手ですか」(資料2)という問いにおいては、合唱以外の場面で、得意だと感じる生徒よりも、苦手と回答している生徒数が上回っている。これまでの音楽経験の中で、新型コロナウイルスによる感染対策を講じた授業づくりのため、表現活動の時間が確保できず、リコーダーなどの吹奏楽器で音楽表現をする活動や、曲の分析や歌詞の意味を考えながら歌うなど、

【資料2 どの内容が得意、苦手ですか (複数回答可)】



教材から思いや意図をもって協働的に表現をする機会が少なかったからではないかと推察される。また、中学1年生は、思春期や変声期を迎え、自分の内面を表現することに抵抗を持ち始めることも予想される。

このようなことから、学級や学年の仲間と協働しながら、音や音楽に対する自己のイメージを膨らませたり、他者のイメージに共感したりして、音楽を形づくっている要素の働かせ方などを試行錯誤させながら、どのように表現するかについて思いや意図をもち、心から音楽表現を楽しむことができる生徒の育成に力を入れることにした。

3 研究の構想

(1) 目ざす生徒像

仲間とともに学び合う中で新たな気づきや発見に出会い、自分の音楽に対する感性を広げ、思いや意図をもって音や音楽と豊かに関わる生徒

(2) 研究の仮説

- ① 仮説Ⅰ…活動を振り返る場面を継続的に設定することによって、協働的な学びと個の学びを往還させれば、見通しをもって粘り強く課題に取り組むことができるだろう。
- ② 仮説Ⅱ…課題解決や自分の考えをまとめる場面において、知覚と感受を往還させるために言語化の足場かけを行えば、協働的に課題を追求し、音楽に対する感性を広げたり深めたりすることができるだろう。
- ③ 仮説Ⅲ…活動の見通しをもたせ、領域を往還させた単元構想をすれば、思いや意図をもって主体的に音楽表現活動に取り組むだろう。

(3) 研究のてだて

- ① てだてⅠ…「活動の振り返り」の継続的な設定〔協働的な学びと個の学びの往還〕(仮説1)

本時の内容における疑問や成長したことを、振り返りながら次時の内容につなぐことを意図し、1単元で1枚の振り返り用紙を用意する。「学習内容の振り返り」に加え、音楽を共に創り上げたときの仲間の行動、つぶやきや発言から自己を振り返る「活動の振り返り」を行う場面を設ける。授業の最後に音楽表現を創っていく活動を振り返り、他者からどんなことを学び得たのかを記録することで、協働的な

学びから個の学びへ考えを整理する。また、振り返ったときに自らの課題を見つけ、次時にどのように学んでいきたいか見通しをもたせることを狙った。単元を通して協働的な学びと個の学びを往還させることによって見通しをもって粘り強く課題に取り組むことができるのではないかと考えた。

② てだてⅡ…言語化の足場がけ〔知覚と感受の往還〕(仮説Ⅱ)

知識・技能と思考の往還が必要とされる音楽科において、知覚(音楽を形づくっている要素を理解すること)と感受(それらが生み出す特質や雰囲気を感じることを)結びつけて、言葉でコミュニケーションを図ることが必要不可欠である。課題解決や自分の考えをまとめる場面において、身体表現などで音を可視化させる活動を取り入れたり、タブレット端末で録音や録画をして自分や仲間の演奏を聴き合ったりすることで、音楽に対する感性を広げたり、深めたりすることにつながっていくのではないかと考えた。

③ てだてⅢ…単元構想の見直し〔領域と領域、単元と単元の往還〕(仮説Ⅲ)

音楽科には「表現」と「鑑賞」の二つの領域があり、「表現」の中に歌唱、器楽、創作の4つの内容がある。これらの教材を一つ一つ独立させて学習するのではなく、領域を往還するように単元を組み直した。1時間の授業の中でも課題解決しながら技能を磨く「歌唱表現や器楽表現の活動」、自分の言葉でよさを語り、課題解決のてがかりとなるような「鑑賞の活動」、学び得た音楽を形づくっている要素と日常生活と結びつけながら思いや意図もった「創作の活動」の三つの活動を適宜行う。さらに明確なゴールを決め、達成に向かっていく単元を構想することで、生徒の困りごとや気付きから課題が広がるような授業を構成する。また、単元と単元につながりをもたせ、生徒がより豊かに音や音楽と関わることで思いや意図をもって「もっと思い通りに表現したい」という気持ちを育ませることを意識する(資料3)。

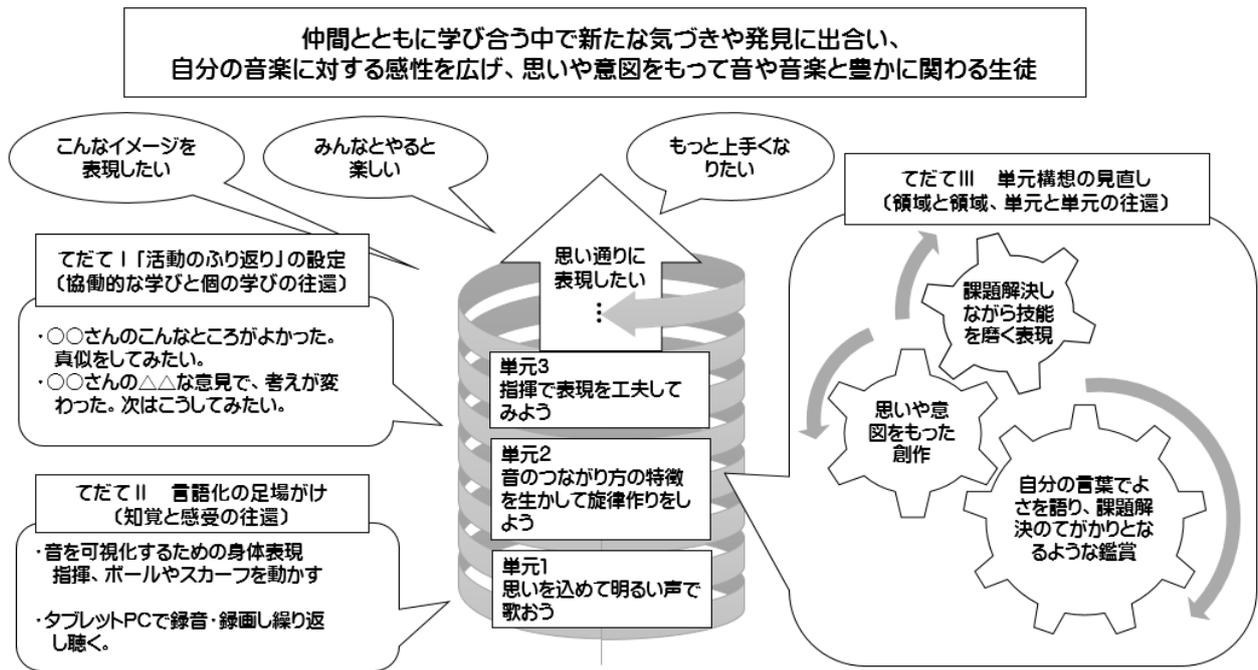
【資料3 領域を往還させた創作表現の例】

単元2	音のつながり方の特徴を生かして旋律作りをしよう
ゴール	順次進行、跳躍進行を使い「○○」している「○○」をテーマに旋律を作曲する。
第1時	音のつながり方の特徴を生かして旋律の動きを感じ取ろう 『主人は冷たい土の中に』【歌唱表現】【器楽表現】
第2時	曲の構成を感じ取って演奏しよう 『主人は冷たい土の中に』【歌唱表現】【器楽表現】
第3・4時	音のつながり方を意識して旋律を作ろう 『主人は冷たい土の中に』【創作表現】

 単元同士も往還させる

単元6	マイソングを作ろう
ゴール	七五調の歌詞と『主人は冷たい土の中に』と同じコード進行の16小節の旋律をとドラムパートを作曲する。
第1時	語感を生かして歌詞に合うリズムを作ろう 『浜辺の歌』【歌唱表現】【器楽表現】【創作表現】
第2・3時	歌詞に込められた思いを生かして二部形式の旋律を作ろう 『主人は冷たい土の中に』【歌唱表現】【創作表現】
第4・5時	リズムを生かして伴奏をつけよう 【創作表現】

4 研究計画



5 仮説の検証方法

生徒 A の変容を中心に捉えて考察し、手立ての有効性を検証する。生徒 A は明るく活発で、のびのびと歌う姿が見られ、表現することに抵抗がない様子が見られる。しかし、グループで考えを深めたり共有したりする場面では、自分の考えがまとまると早々とワークシートに書き込み、それ以上他者の考えを取り入れる姿は見られなかった。年度初めのアンケートでは、音楽は好きだが、歌詞の意味を考えながら歌うこと、工夫しながら歌うことに苦手意識を感じている。単元1「思いを込めて明るい声で歌おう」では、活動中は、にこやかに歌う様子が見られるものの、振り返りで「明るい声で歌えていないから、しっかり声を出したい。」「まだできていないから次回がんばりたい。」など繰り返し記述しており、歌詞から歌のイメージを膨らませて工夫するてだてに結びついていない様子である。この授業実践を通して、協働的に学ぶなかで、自己のイメージを膨らませたり、他者のイメージに共感したりすることや、思いや意図を持って表現することの楽しさに気付かせたい。

6 実践

ここで単元3「指揮で表現を工夫してみよう」で実際の活動の様子を述べる。前単元で、変声期やパート練習などの混声合唱の取り組み方を一通り学び、『カリブ夢の旅』を合唱できるようになった。音楽づくりには細かな表現方法があり、仲間と声をそろえる一体感や曲想によって声の出し方を工夫する表現の楽しさに気付かせたいと思い、単元のゴールを「指揮で表現を工夫する」ことに設定した(資料4)。

【資料4 単元構想図 指揮で表現を工夫してみよう】

第 1 時	<p>○指揮に挑戦してみよう 『カリブ夢の旅』『カルメン』より前奏曲』『浜辺の歌』【指揮表現】【鑑賞】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・指揮の必要性について考え、どんな合図をしているか考える。 ・曲の冒頭部分を聞き、指揮をするために、どんな情報が必要か考える。 ・楽譜から情報を読み取り、曲に合わせて指揮をする。 ・指揮をしながら困ったことやこれからやってみたいことを共有し、振り返りを行う。
第 2 時	<p>曲の構成を感じ取って、工夫してみよう 『「カルメン」より前奏曲』【指揮表現】【鑑賞】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・曲をはじめから最後まで聴き、3つの旋律の構成に気付く。 ・3つの旋律の特徴やよさを捉え、どのように指揮を工夫するか考える。 ・曲に合わせて練習する。 ・指揮の様子を撮影し、映像で確認しながら振り返りを行う。
第 3 時	<p>演奏者に伝わる指揮をしてみよう 『「カルメン」より前奏曲』【指揮表現】【鑑賞】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・シンバルの音がどのタイミングでなっているか手拍子で確認する。 ・どのような振り方や合図を出せばよいのか考える。 ・2人の指揮者の映像を観て振り方の違いや、音楽表現の違いに気付く。 ・シンバル奏者、指揮者に分かれて練習する。 ・指揮の様子を撮影し、映像で確認しながら振り返りを行う。
第 4 時	<p>指揮で表現の工夫をしよう 『うみ』【器楽表現】【指揮表現】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アルトリコーダーで「うみ」の旋律を確認し、グループで録音する ・出だしのタイミング、伸ばす長さの合図を確認する。 ・ペアで指揮者、演奏者に分かれ練習をする。 ・どんな「うみ」にしたいか、情景を思い浮かべ指揮の工夫をする。 ・4人グループで指揮者1人、演奏者3人に分かれてそれぞれの指揮に合わせて演奏し録音する。 ・初めの音源と聴き比べ、どのように音楽が変化したか振り返る。

単元の導入に既習曲『カリブ夢の旅』を歌った後、「指揮は何のために必要なのか」について考えさせた。指揮者は、最初の合図を出したり、曲の速さを決めたりするのに必要だという意見がある中、生徒Aは、「指揮者は(演奏を引き立てる)見た目のために必要だ。」という考えをもっていた。その後、楽譜から ff(フォルテッシモ=とても強く)が記述されていることや既習曲『浜辺の歌』と同じ二拍子の指揮の形で振ることを知り、タブレット端末で配布された音源を、何度も再生しながら指揮の練習を進めた。(写真1)しかし、生徒Aの第1時の記述からは、活動の振り返りでは表情豊かに指揮をすることの大切さをつかみ始めているが、内容の振り返りでは、表情豊かに指揮することは演奏者

【写真1 授業の様子】



のためではなく、音楽表現の視覚的効果を現すためだと考えている(資料5)。

第2時では、続きを聴かせた。冒頭30秒部分を㊦の旋律とし、曲の構成に注意して聴かせ、㊦の旋律に対して対照的な特徴をもつ㊧の旋律と㊨の旋律があることを知り、それぞれの旋律にあった指揮をするためにどのような工夫をすればよいか話し合いを始めた。

生徒Aの班は、しばらく曲に合わせて直感的に指揮をし続けていた。次第に生徒Aが、擬音語を使って班員にイメージを伝え、周りの生徒がその発言に、共感しながら生徒Aの発言を自分の言葉で言い直し、ワークシートに記入しながら活動を進めていた(資料6)。擬音語で抽象的な表現をする生徒Aが話し合いのきっかけを作り、それに反応するような形で、周りの生徒が生徒Aの気付きを言語化して支える様子があった。第2時の振り返りでは、グループ活動で班員に言い換えてもらったことが文章として記述され具体的に工夫したいことを書き示すことができるようになっている(資料7)。

他の班でも、音源に合わせてメトロノームを使いテンポを確認し、3つの旋律はリズムが大きく違うが、一定の速さの中で演奏されていることに気付き、振り方の違いで音楽のイメージを伝え、表現を工夫しているということが分かった。

【資料5 生徒A 第1時の振り返り】

活動の振り返り

〇〇君が手だけじゃなくて上半身全体を使って指揮をしていて良かった。

内容の振り返り

指揮は大きさに振ったほうが、強弱が見た目でもわかって、雰囲気が出ること。

【資料6 生徒Aの班の様子】

A: ㊦の旋律は、こうやって腕をぶんぶん振りたくなるな。

S1: わかる。(生徒Aと一緒に体を動かしながら)力強い感じがするよね。

S2: じゃあ㊧の旋律は?

A: こう、サラっとした感じ

S2: なでるような感じだね。

A: そうそう。ゆるーく振りたい。

【資料7 生徒A 第2時の振り返り】

活動の振り返り

ちょっと指揮のコツがつかめた。〇〇さんがちゃんと差をつけて振れていてよかった。

内容の振り返り

㊦の旋律は急いでいる感じがするので(腕の幅を)広く振って力強さを表現したい。また、楽しく弾む感じで振りたい。㊧の旋律は㊦の旋律より静かだから、緩く振っていききたい。

グループ活動の後、全体共有をしたときに、「曲の特徴で終始シンバルの音が目立っている。」という発言から、第3時では、「指揮者は楽器の入りのタイミングも合図しているはずだから、二拍子を振りながら合図が出せるように表現しよう。」と課題が広がっていった。生徒Aは単元の最後に、指揮者の役割に気付き、演奏者にとって指揮をよく見たいと記述した。(資料8)

【資料8 生徒A 単元の振り返り】

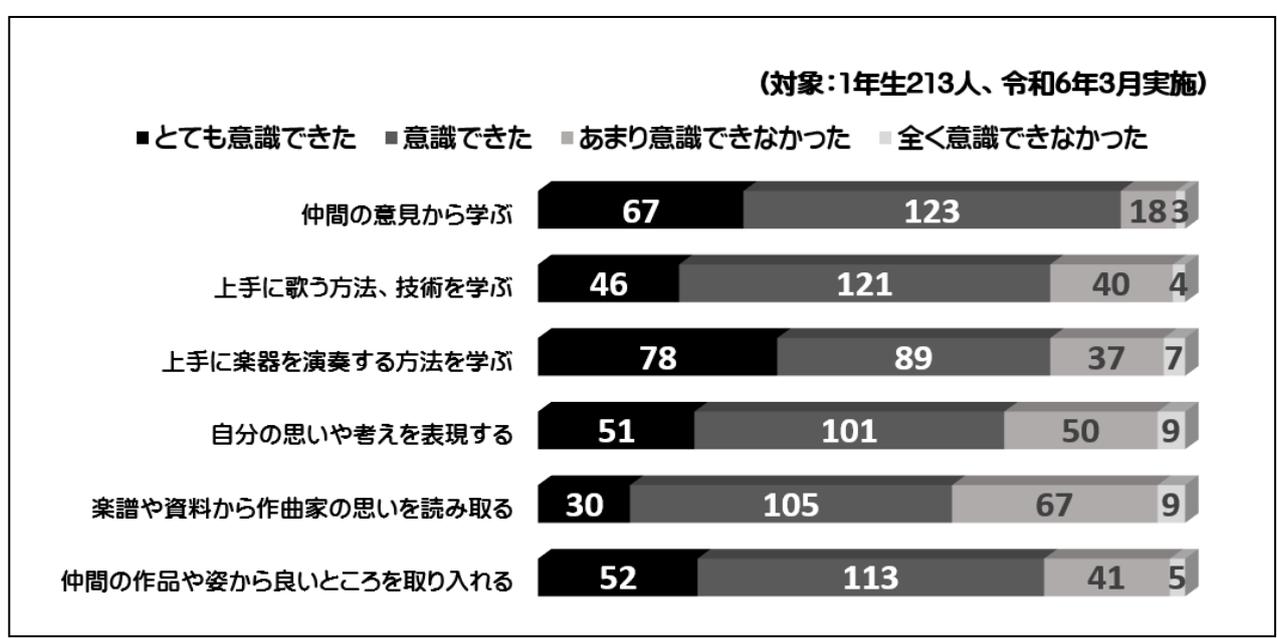
指揮者は見た目が大切だと思っていたが、スポーツで言う指令塔のような役割をしていることが分かった。いろんな指揮者の演奏を見たときに同じ曲でも、雰囲気が違うのでとても大切な役割をしていることが分かった。指揮者は腕の振り方以外にも表情や合図を出すことが大切だ。合唱で歌う時にも色んな合図があるはずだから、指揮者をよく見て気をつけていきたい。

7 成果と課題

(1) 成果

本研究の実践を通して、生徒たちは、グループ活動や全体で考えを共有する場面で、身体表現やボールを使って音や音楽に対する自己のイメージを膨らませたり、他者のイメージに共感したりして協働的な学びを獲得し個の学びへと往還させていくことで知識を定着させていくことが分かった。さらに表現領域と鑑賞領域を往還させることで、音楽を形づくっている要素の働かせ方などを試行錯誤させながら、思いや意図をもち、より探究的に表現活動を楽しんでいることが分かった。年度末のアンケートからも、多くの生徒が中でも「仲間の意見から学ぶこと」「仲間の作品や姿から良いところを取り入れること」に約8割の生徒が肯定的な回答を示し、多くの生徒が、協働的な学びの場面を意識して授業を受けていたことが分かった。(資料9)

【資料9 年度末の音楽の授業アンケート】



① てだてI…「活動の振り返り」の継続的な設定〔協働的な学びと個の学びの往還〕(仮説1)

仲間の姿からの学んだ、「活動の振り返り」を習慣化させたことで、他者の活動の様子に目を向ける生徒の姿が増えた。仲間の気付きや発言を注意深く聴こうとしたり、一緒に歌っている姿を見て技能を高めようとしたりするなど、互いに身近な目標となる存在を見つけて、技能の向上につながったと感じる。また、生徒Aに限らず多くの生徒が、グループ活動で学んだことをじっくりと整理させ、自分の課題を設定することができている(資料10)。

【資料10 ふり返りの様子】

音のつながり方の特徴を生かして旋律作りをしよう			
ゴール (1) 音のつながり方の特徴について表したいイメージと関わらせて理解する。 (2) 創意工夫を生かした表現で旋律や音楽を作るために必要な、課題や条件に沿った音の合わせなどの技能を身につけ、創作で表している。 (3) リズム旋律を知覚しどのように音楽を作るか、思いや意図を持っている。			
	学習活動の振り返り	学習内容の振り返り	次回の自分へ
つかむ場	5月2日 目標 旋律の動きを感じ取って歌おう	さんが大きな声ではつらつと、明るく口角をあげて歌っていたので真似して、はつらつと歌えるようにしたい。	音楽では音のつながりの特徴がありったり、歌には強弱や、明るく歌って歌詞に込められたおもいを考えればきれいに歌えることを知ったから次はそれを意識してがんばりたい。
	5月9日 目標 曲の構成を感じ取って歌おう	さんが曲の構成を感じ取って2段目3段目を上手な言葉で埋めていたので真似したい。	最後の教科書を見ながらドレミを言うので全然できなかったからいえるようにしたい。
作る場	5月9日 目標 曲の構成を感じ取って歌おう	さんが曲の構成を感じ取って2段目3段目を上手な言葉で埋めていたので真似したい。	曲の構成を自分で作って曲を作ると言っていたので順次進行や跳躍進行を使って構成したい。
	5月9日 目標 曲の構成を感じ取って歌おう	さんが曲の構成を感じ取って2段目3段目を上手な言葉で埋めていたので真似したい。	終わりそうな感じは「ド」で終わり、続きそうな感じは「ド」以外で終わることがわかった。

さらにどの単元においても同じ形式の振り返り用紙を用いたため、生徒たちが授業の流れに見通しをもって取り組むことができた。したがって、これらのおかげでは有効だったのではないかと考える。

② てだてⅡ…言語化の足場がけ〔知覚と感受の往還〕(仮説Ⅱ)

音を可視化するために身体表現として、先述した指揮以外にも、聞こえてきた音を手拍子で表現したり、ボールやリボン、リトミックスカーフを使って旋律の動きを捉えたりする活動を繰り返し行った(写真2)。音に合わせて体を動かし、音楽の大枠を捉えた後、同時に流れる複数の音から自分が着目した旋律やリズムの特徴を言葉にしていた。言語化する過程で、オノマトペで表す生徒がいても、互いに認め合い、「それってこういうこと？」と新しい気付きや発見を相互にやり取りをしながら言葉や音の一つ一つに心を寄せて聴き、学びを深めていたことがわかった。

【写真2 リトミックスカーフ、リボンを使って旋律の動きを捉える活動】



また、タブレット端末は、録音し自分や自分たちの演奏を何度も聞き直したり、客観的な立場で聞き直したりできる点で大きく活用できた。「自分は〇〇を意識しているつもりだったが、録音したものを聴いているとあまり変化がなかった。もっと差をはっきりつけるために、こんな練習をがんばりたい。」という記述が、多く見られるようになった。繰り返し聞き直すことで正しくモニタリングができ、今の自分の演奏とこんな風に表現したいというイメージとの差を埋め、新たな気付きから感性を働かせて、技能向上に努めていた。継続することで技能の向上や表現の変化を実感でき、意欲につながったのではないかと考える(資料11)。

【資料11 リコーダーの演奏を記録したワークシート】

曲名	間違えず 止まらず	曲想 アーティキュレーション	音色 音ミス	ココを直したい 次回の私へ	録音カード 提出スペース
オーラ・リー	4 ₁₅	2 ₁₅	5 ₁₅	音がとぎれとぎれな印象を受けるので音を伸ばしてなめらかに続くように演奏したい。ソの前は特に身構えているような感じで止まってからソの音を出しているから不安定にならないようにソの前後の部分に重点的に練習したい。	
うみ	4 ₁₅	3 ₁₅	5 ₁₅	下の段で息を吸う部分でうまく息がすすず、息が弱くないため、音がブレブレになりながら伸ばしているので息を大きく吸うようにしたい。ソの音を出す時と、低いソを出すときで混ざってしまい、違うので、新しく出てきたソのほうをあまり慣れていないので、何回か単体で練習し、そのあとに全部通して吹く。	
うみ	3 ₁₅	4 ₁₅	3 ₁₅	低いうとソの音を出すとき、456の部分の場所をうまく指で押さえられず、少し高い変な音が出てしまったので、そこを押さえない時でもあまり動かさずしておこうと思います。	
うみ	4 ₁₅	4 ₁₅	4 ₁₅	たまに穴を押さえるとき指が半分しか押さえられておらず、少し高い変な音が出てしまうことがあったけど、ミスが減ってきた。次はノーミスで吹けるようになりたい。	

③ てだてⅢ…単元構想の見直し〔領域と領域、単元と単元の往還〕(仮説Ⅲ)

年間のカリキュラムを見直し、前時の内容で、できたことや生徒の疑問、既習事項を積み上げるような形で単元を構成することができた。表現領域と鑑賞領域を同じ単元の中で往還させたことで、鑑賞の授業で学んだことや取り入れたことなどの教材のよさを生かしながら表現活動の目標設定することや、逆に歌やリコーダーで演奏したことで、それぞれの旋律に着目して鑑賞し、音楽を形づくっている要素をより細かく捉え、自分の言葉で音楽のよさを表現することができていた。単元の初めに明確なゴールを示したことで、前時の録音した演奏を見て、次の課題解決につなげるなど試行錯誤の中で着実なステップを踏むことができ、達成感をもって大きな課題に取り組むことができた。また、創作表現「単元2音のつながり方の特徴を生かして旋律作りをしよう」「単元6 マイソングを作ろう」においても、表現したいものを自分で設定し、思いや意図をもって表現活動をすることができた。作った旋律に対しても

自らの課題を見つけ、試行錯誤していく習慣が身に付き、「もっと思い通りに表現したい」という気持ちを育ませることができ、てだてとして有効だったと考える。

(2) 課題

今回の実践を通して、考えを整理する場面の重要性を実感した。しかし考えを整理するまでにはある程度の時間を要するため、自己の課題設定を行うまでの時間が十分に取れない時間が多かった。振り返りと同等に仲間と協働して音や音楽に触れたり、試行錯誤しながら表現したりする活動も大切だ。活動の中で意義を理解させることや、振り返り用紙を書くことそのものが生徒にとって、過度な負担にならないよう改良の余地がある。また、手が進まなかった生徒や、時間内に書ききれなかった生徒にもっと目を向け、授業改善に努めていきたい。

8 おわりに

日常生活の中でマスクをつけることが当たり前になった生徒たちにとって、今まで通り歌える日々が戻っても、歌詞を伝えるための口の開き方や十分な発声の習慣がなく、想像以上の壁があることが分かった。しかし、言語活動の足場がけをねらいとして取り入れた身体表現活動が、のびのびと表現することへの抵抗感を減らし、表現活動をすることにつながったのではないかと考えた。

さらに身体表現は、抽出生徒以外にも、課題がつかみづらく話し合い活動に消極的な生徒や、来日して間もない外国籍の生徒にも変化が見られた。班員と目を合わせながら楽しそうに指揮をしたり、できないことで周りに助けを求めたりなど、活動を支える機会が生まれる(写真3)。その変化に気付いた他の班員が、話合いのきっかけしてコミュニケーションを広げていることが分かった。安心した学級の雰囲気作りが音楽の授業の土台となり、強弱を意識してのびのびと歌うことや作った曲を紹介しアドバイスをもらうなどの、自分をさらけ出せる表現活動につながる事が分かった。この学びを生かして豊かな音楽表現ができる授業づくりのために、中学生であっても学年や発達段階にかかわらず、音楽の授業ならではの非言語活動を積極的に取り入れ、温かな安心して表現できる雰囲気作りを大切に指導にあたりたいと思う。

【写真3 授業の様子】



参考文献

- ・『中学校学習指導要領』文部科学省 平成29年告示
- ・『中央教育審議会の答申』文部科学省 令和3年1月